

遊びのチカラ  
アクティブ・  
チャイルド・  
プログラム

モデル団体  
『東山スポーツ少年団（名古屋市：剣道）』

「ただ楽しい、から、  
「ルールを守ってこそ楽しい、へ。  
次第に深まる子どもたちの理解



1



2



3

▲この日の「遊び」のひとつ、「河童リレー」。頭に載せたマーカーを落とさないように運び、リレーする遊びだ。走り終えた走者は、次の走者の頭の上に、きちんとマーカーを載せるのも務め。大切な触れ合いの機会でもある



▲準備運動は吉田先生がその都度指名する「ちびっ子リーダー」さんのかけ声で行う。1時間の稽古時間を有効に使うよう、子どもたち自身が自主的に動く。準備運動・遊び・稽古がうまく連動している



▲「河童リレー」の後は、マーカーを使ってもうひとつ、「河童オニ」を。赤いマーカーを頭に載せたオニにタツ子をされたら、オニ交代。そのときには前のオニが赤いマーカーをちゃんと頭に載せてあげる

前号で触れた通り、ACCPは文科省委託事業として日本体育協会が行う「子どもの発達段階に応じた体力向上プログラム」の普及啓発活動のひとつの形。子どもたちの心をとらえ、継続しやすい運動遊びや伝承遊びはその重要なアプローチだが、もちろん「遊び」の体験が目的なのではない。子どもたちが活動的になれる環境を整え、からだを動かすことや人と交わり、協調することを、自発的・積極的に行うことができる子どもを育み、体力向上につながるこれが第一義。東山スポーツ少年団の子どもたち

ACCPの第一義

「子どもたちがみんな、ニコニコしてやってくる。週2回の稽古を楽しむにしているのが、わかります」  
今春からアクティブ・チャイルド・プログラム（ACCP）を導入した東山スポーツ少年団（剣道）の松井満男団長は、道場に集う小さな剣士たちの表情に、明らかに変化を感じている。同団指導者で、ジュニアスポーツ指導員であり、心理カウンセラーとしてのキャリアが長い吉田繁敬先生と臨床心理士の資格を持つ中村圭子さんも、「出席率が明らかに上がりました」と口をそろえる。



「遊び」を終えると、子どもたちは素早くモードを切り替えて剣道の稽古へ。継続団員の子どもたちは木刀を持って板の間へ

▲畳の上で順番を待つグループも、しっかりと「河童オニ」の様子を見ている。剣道では「見取り稽古」という言葉がある通り、他人の動きを見ることもまた稽古なのだ



▲子どもたちの活動を見守る保護者のみなさん。臨床心理士やスポーツリーダーの資格を持つ方々も



▲中高生のリーダーたちの参加頻度が増し、「遊び」をともにした後は、継続団員たちの打ち込み稽古の相手を務める。打たせる側が上手いと打つほうも打ちやすく、正しい動きが身につく効果が高まる。また、中高生にとっても子どもたちにとっても、年齢差を超えた触れ合いの好機である

▼垂れの代わりに名入りの鉢巻を巻く新入団員たちは、畳の上で基礎の修練。まだ竹刀は持たないが、剣士の気迫は十分だ



遊ぶ前には必ず「遊ぶ?」と尋ねる。やらされているのではなく、能動的な活動でこそ意味があるから



アクティブ・チャイルド・プログラムの内容については、日本体育協会のホームページからご覧になれます。  
→<http://www.japan-sports.or.jp/publish/tabid/776/Default.aspx#guide08>

には、その自発性・積極性の兆しが、はっきりと見られる。

夕暮れが近づくころ、道場を指して、子どもたちが足どり軽やかに集まってくる。

午後6時、小学1〜4年生の一部の開始時間。礼と黙想の後、準備運動のリーダー役を吉田先生が指名する。「5月までは私が行っていましたが、6月からこの形にしました。今では、子どもたちは準備運動が次に続く遊びと稽古のためにあることを、しっかりと理解し、彼ら自身が主体的に行っています」。

からだをほぐすと、「遊び」の開始。だが、ここで必ず吉田先生が子どもたちに聞くことがある。「遊ぶ?」ってね。彼らから「遊ぶ!」という言葉を引き出すことで、自分たちが主体的に遊びたいんだという気持ちに彼ら自身が気づくことになるんです。やらされているのではなく、子どもたちの内発的・能動的な活動であるべきですから」。

## 「遊び」がつくり出す 子どもの規律と一体感

当初は、一部、の稽古時間のみACPを導入したが、子どもたちの強い要望を受け、小学5・6年生の2部でも「遊び」の時間

を組み込んだ。中には、「一部」の時間にも参加する子どもも。また、中高生のリーダーたちの参加頻度も増し、年齢を超えたコミュニケーションの環境ができてきている。

今、この少年団には一体感があがる。ここに「遊び」が果たす役割は大きい。新入団員と継続団員の間にあった心理的な距離が解消され、新しい環境になじみにかつた子、神経質だった子が、団の輪の中に入っていきけるようになった。道場を見渡しても、無関心を装ったり、非協力的な行動をとったりする子は1人もいない。子ども同士が自発的に言葉をかけ合い、有意義な稽古時間をつくり出している。

「最初は、楽しい」ことが大事だったと思うんです。しかし、子どもたちは次第に、一人ひとりが勝手な行動をしていたら「遊び」は成り立たない、ルールを守ってこそ楽しい、ということを理解していききました」。毎回のACP活動を詳細に記録し続けている中村さんの実感だ。

遊びを通して、縦横の垣根を越えてコミュニケーションするようになった少年少女剣士たち。次回は、本来の武道の稽古や行動における彼らの進化に、焦点を当ててみたい。